

社会的絆の強さ

そして絆の強い相手との価値観のずれの関係について

坪井 優実

TSUBOI Yumi

：問題

-) 社会的絆

無藤ら(2004)は、社会的絆が幸福や人生満足の主要な源泉であると多くの研究者が一致をみている(たとえば、Myers, 1999)と述べ、よい親密関係は、幸福の必須条件であり、ネガティブなライフイベントから人々を守る実的なそして感情的なバッファとして機能している(Argyle, 1999)と論じている。

また、那須ら(2007)は「社会的絆の理論」について、Hirschi(1969)をとりあげ、以下のように述べている。

非行に関する多くの理論のうち、Hirschi(1969)の「社会的絆の理論」は、社会学の犯罪研究から誕生した。彼は、個人を社会に繋ぎとめておく4つの社会的絆が弱くなったときに非行が発生すると指摘した。また、「社会的絆の理論」は、社会的絆を個人と社会の紐帯であるとしながらも、社会での日常生活のありかたにより、社会的絆が培われるといった個人の内的な抑制要因として機能することに焦点をあてた点に特徴がある。

Hirschi(1969)は、社会的絆として「愛着(Attachment)」「コミットメント(Commitment)」「巻き込み(Involvement)」「規範観念(Belief)」の

4種類をあげている。「愛着」とは、家族や学校、仲間など、愛着を感じる相手の期待に沿い、裏切らないとする感情レベルでの絆である。誰も非行行動は望まないのに、愛着を感じる相手をみつけることができれば、個人と相手とを結ぶ絆すなわち内的抑制要因が働くとされる。「コミットメント」とは、行動を選択するに際して損得を計算して行動することや、社会で承認されている目標の達成に関わっている程度を意識するといった意識レベルの絆である。遵法的な世界で成功しようと考えている人にとって、非行行動はその世界での成功の機会を逃してしまうことを意味するので、内的抑制要因が働くとされる。「巻き込み」とは、慣習的な活動に自分をまきこませる包絡の度合により、社会との紐帯をもち、日常的な事柄に忙殺されている限り、非行行動に陥らないとされている。つまり、慣習的活動に従事する時間が多いほど非行行動をする時間がなくなるとしている。「規範観念」とは、法を正当なものとして、それを中和しない内的規範ともいえるべき信念を持つ人ほど非行行動には走らないというものである。

これら4つの社会的絆においては、主要な他者との関係を重視する関係上、「愛着」が重要な要素といえる。

-) 態度の類似性と好意性について

齋藤(1987)・(2007)は、態度の類似性と対人魅力との関連について以下のように述べている。

似たもの夫婦」とか「類は友を呼ぶ」などといわれるように、意見や態度が似ている者同士は、互いに相手に好意をもつ。このような態度の類似性と相手に対する好意度との関係については、多くの実験や調査が行われている。

特に Byrne は、この態度の類似性と好意性について多くの研究を残している。

Byrne(1971)は人に対する好意はその人から受ける報酬によって決定されると仮説し、人にとって相手の人の態度が自分の態度に似ていることは大きな報酬になると考えた。この仮説を検証するために Byrne は、相手の人との諸態度の類似率、類似項目数、諸態度の重要性、関心度などの要因を独立的にあるいはシステマティックに操作し態度の類似、非類似と相手の人に対する好意との関連について一連の実験を行った。

Byrne&Nelson(1965)の実験はこのような態度の類似性と好意の関係の実験的研究の一環である。この研究は特に態度の類似性が好意をもたらすときに、より多くの事象について態度が類似していることが重要なのか、類似している事象と類似していない事象数との比率が重要なのかという類似性の量と比率の関係を検討している実験であった。結果は、類似度が増せば増すほど相手の人への好意度は高くなり、それは正の直線的な関係にあることを証明している(図1)。また、好意度は類似点の数量ではなく、類似と非類似の比率によって決まる

ことも明らかにしている。

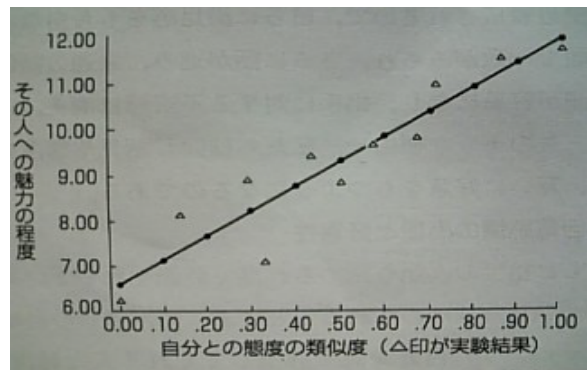


図1 相手の人と自分の態度との類似性とその人への魅力の程度との関係 (出典: 齋藤勇 2007 人間関係の心理学 第2版 誠信書房)

-) 価値観・態度

TBS総合嗜好調査は、TBS編成考査局調査部が1976年以降毎年一定の時期に実施している意識調査であり、衣・食・住・趣味・ライフスタイルなど日常生活に密着した多様な事柄に対する人々の好みを調べることを目的としている。

この中には、個人の価値観に関する調査項目も含まれている。取り上げられた19の価値観は、1970年代後半の時点で1980年代以降に予測されるトレンドといわれていたものの中から比較的重要度が高いと思われるものである。渡辺(1994)は、1981年から1992年までのデータを用い、価値観の構造や時系列的变化を検討している。

価値観の構造に関しては、回答パターンと数量化 類によって分析した(図)。第1軸は、「海外志向」「性の解放」「おしゃれ化」などの享楽志向的価値観と「老後への関心」「省エネ&省資源志向」「生活簡素化志向」などの堅実志向的価値観が対極をなしてい

た。第2軸は、享楽志向的な価値観の中でも、「おしゃれ化」「海外志向」「うるおい志向」のような優雅にリッチなものを求める価値観と「性の解放」「感覚志向」など刹那的感覚的な価値観を分ける軸であった。

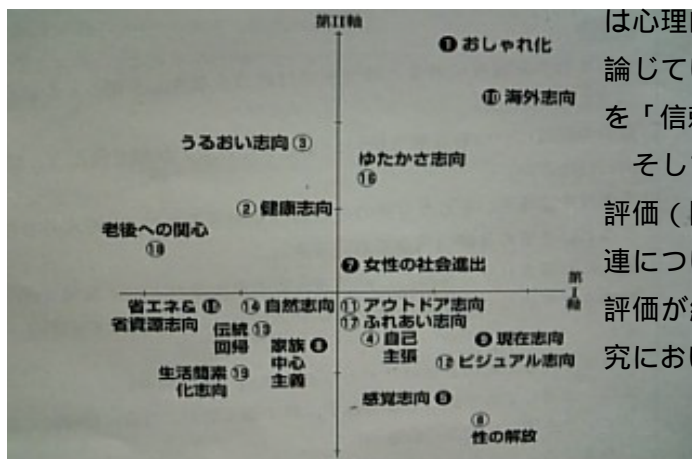


図2 数量化 類による価値観の布置 (渡辺, 1994)

白抜き数字は変化の激しい価値観の番号を表す。

「女性の社会進出」「現在志向」など、12年間で大きく推移した価値観、12年間で一貫して上昇してきた価値観にも注目しながら、分けられた4領域それぞれから価値観尺度項目を選び、それを参考にオリジナル項目を作成して、本研究の価値観尺度の項目とした。

以上のような先行研究を踏まえ、本研究は、「自分が絆を強く感じる人と同じ価値観をもつようになるだろう」という仮説を立て、社会的絆の強さそして絆の強い相手との価値観の類似の関係について、「価値観のずれ」に着目して検討したい。

なお、先述の那須ら(2007)の観点から、本研究では社会的絆の中でも特に「愛着」をとりあげることとする。

また、高木(2008)は、資源としての社会的絆とは「一般的信頼と互酬性に基づく人と人の心理的な結びつき」であり、個人には心理的満足や実質的な支援を提供すると論じている。このことから、本研究では絆を「信頼」の面からも測定する。

そして、金政(2007)が、愛着と関係への評価(関係満足度および関係重要度)の関連について論じていることから、関係への評価が絆を測る上でも重要だと考え、本研究においても関係への評価尺度を用いた。

：方法

-) 対象者、手続き

大学生 203 名

大阪：関西大学社会学部の学生 152 名。

「リスク心理学」の授業にて受講者に答えてもらった。

東京：東京の大学に通っている友人、友人の知り合い、食堂に居た学生 51 名に面前自記式にて答えてもらった。

-) 調査時期

大阪：2008年11月14日

東京：2008年11月20日～12月6日

-) 質問紙

本研究では、以下の愛着、信頼、関係満足度、関係重要度の4つの尺度を用いて、家族と友人それぞれに対する社会的絆の強さを測定した。

「愛着尺度(小林(1993))

この尺度のみ、先行研究に従い、家

族は4項目、友人は5項目とした。

「信頼尺度(榎本(1999)を参考にオリジナル項目を作成)5項目

「関係満足度(関係への評価尺度)(金政(2007))2項目

「関係重要度(関係への評価尺度)(金政(2007))2項目

価値観尺度については、TBS総合嗜好調査を参考に、「女性の社会進出」「現在志向」など、12年間で大きく推移した価値観、12年間で一貫して上昇してきた価値観にも注目しながら、分けられた4領域それぞれから価値観尺度項目を選び、それを参考にオリジナル項目を作成して、本研究の価値観尺度12項目とした。

また、直前の回答が本人の回答に影響する可能性を考え、「家族 友人 本人」、「友人 家族 本人」の2パターンの調査票を作成し、カウンターバランスを取った。

：結果

【仮説について】

[絆尺度]

絆を測定する4つの尺度の係数は、家族に対する愛着尺度0.71、信頼尺度0.80、関係満足度尺度0.74、関係重要度尺度0.74であり、友人に対する愛着尺度0.64、信頼尺度0.78、関係満足度尺度0.60、関係重要度尺度0.66であった。そして、それぞれの尺度で合成変数を作成した。

[価値観のずれの測定]

12項目それぞれについて、「家族と本人」「友人と本人」の価値観の差を距離にして求めた。すなわち、その項目についての価

値観が一致している場合、価値観の差の距離(以降、「価値観のずれ」と表記する)は0となり、ずれが大きいほどその値が大きくなる。

[仮説について]

絆尺度の愛着、信頼、関係満足度、関係重要度のそれぞれの合成変数と12項目各々の価値観のずれの相関係数を算出した。

すると、家族については、4つの項目で有意な相関が見られた。「結婚するために相手の外見や収入よりも恋愛感情を大切に考える」項目と関係満足度とに $r = -0.17$ 、関係重要度とに $r = -0.14$ の有意な相関が見られた($p < .05$)。「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」項目とでは、4つの絆尺度全てで有意な相関が見られ、それぞれ r は、愛着 -0.17 ($p < .05$)、信頼 -0.26 ($p < .001$)、関係満足度 -0.14 ($p < .05$)、関係重要度 -0.15 ($p < .05$)だった。「人のために自分が尽くすことが大切だと考える」項目と信頼は -0.14 ($p < .05$)であった。「本当は人に知られたくない恥ずかしい話や失敗談を、笑いのネタにして、笑いをとる」項目は信頼と -0.15 ($p < .05$)であった。

友人については、3項目で有意な相関が見られた。「お祭り、年中行事、しきたりなど日本の伝統を守る考えを大事にする」項目と関係満足度とに $r = 0.16$ ($p < .05$)、「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」項目と愛着 -0.17 ($p < .05$)、信頼 -0.23 ($p < .001$)、「人のために自分が尽くすことが大切だと考える」項目とは愛着 -0.17 ($p < .05$)、関係満足度 -0.16 ($p < .05$)であった。

【その他の分析】

家族との絆と友人との絆それぞれ4尺度でt検定を行ったところ、4尺度全てにおいて家族と友人との間に有意な差が見られ

た（愛着 $t(202)=5.48, p<.001$ 、信頼 $t(197)=2.42, p<.05$ 、関係満足度 $t(200)=3.02, p<.01$ 、関係重要度 $t(201)=4.97, p<.001$ ）（図3）

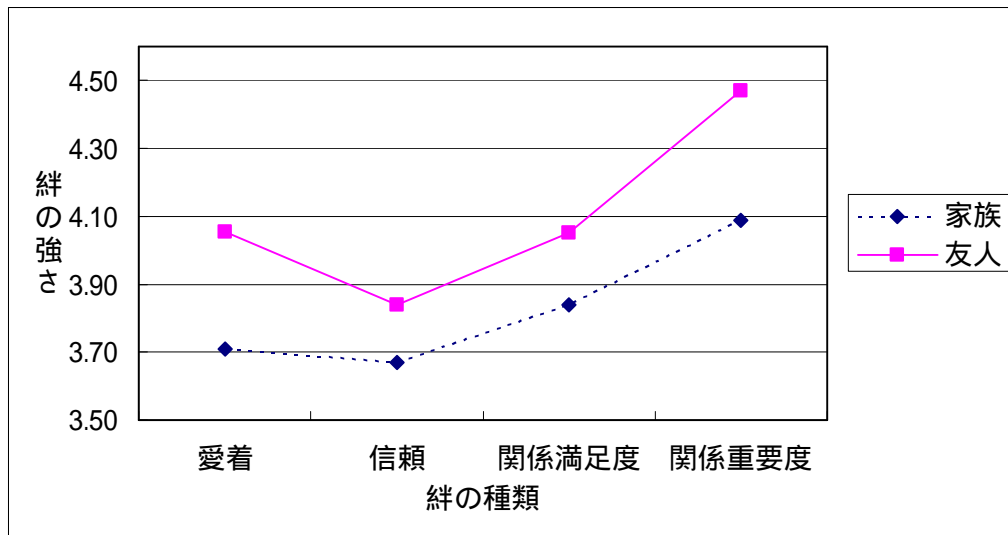


図3 絆の強さとその対象者

家族と友人の項目ごとのずれを図4に示す。

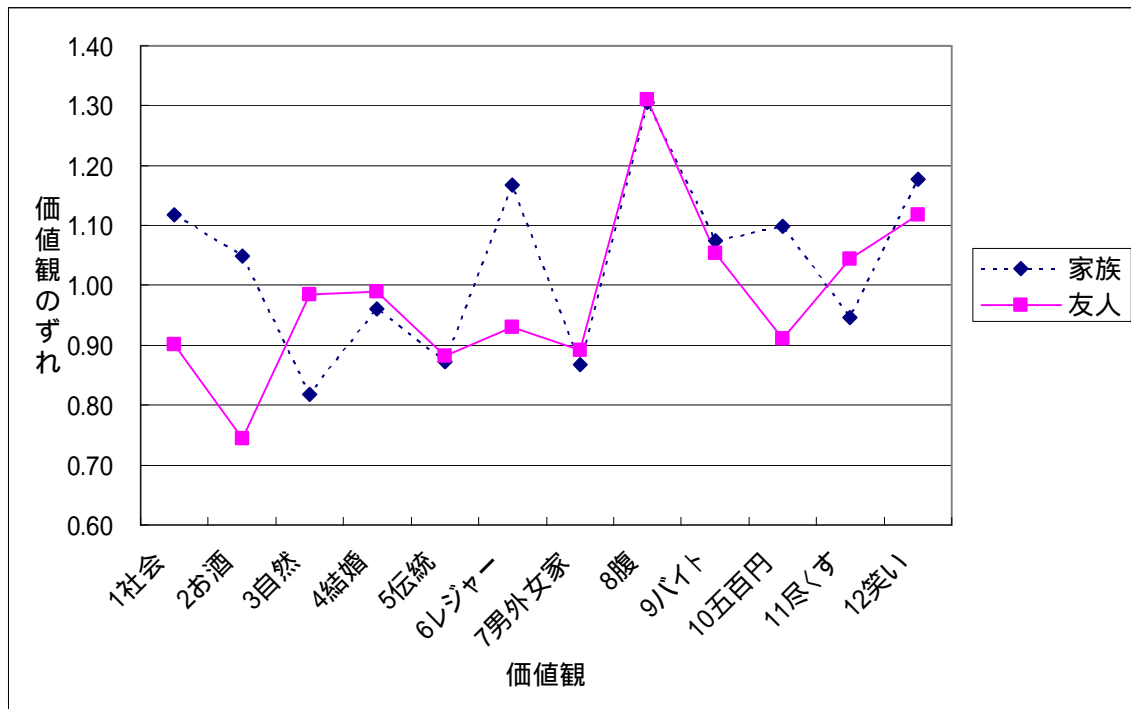


図4 家族と友人の項目ごとのずれ

：考察

仮説について、家族では4項目、友人では3項目で、負の有意な相関が見られた。つまり、その対象との絆が強いほど価値観は類似している傾向があるという結果が得られ、仮説は支持された。

家族との関係満足度が高いほど、また関係重要度が高いほど「結婚するために相手の外見や収入よりも恋愛感情を大切に考える」について家族との価値観が類似している。家族への信頼が高いほど、「人のために自分が尽くすことが大切だと考える」ことが類似し、「本当は人に知られたくない恥ずかしい話や失敗談を、笑いのネタにして、笑いをとる」ことが類似する傾向がある。「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」項目については、愛着、信頼、関係満足度、関係重要度の4つの絆尺度全てで有意な相関が見られた。それは「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」ことは、家族の価値観とほぼ一致していることを示している。これは逆に考えると、例えば家族との絆が弱いほど、家族が「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」と考えている場合、本人は「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」としているということを示している。これは、Hirschi(1969)や小林(1993)らの研究結果が示しているように、家族との絆が弱いほど逸脱行動をする傾向があると考えられる。家族との絆を強くすることによって、逸脱行動を抑止す

ることができる可能性を、ここで見るることができる。

友人については、友人との関係満足度が高いほど「お祭り、年中行事、しきたりなど日本の伝統を守る考えを大事にする」項目において友人と価値観が似ている。友人に対する愛着が強いほど、また関係満足度が高いほど「人のために自分が尽くすことが大切だと考える」価値観は類似している傾向がある。また、友人に対する愛着が強いほど、また信頼が大きいほど「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」価値観が似る。これは家族のこの項目でも相関があった。ここでは例えば友人との愛着または信頼が強ければ、友人が「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」という考えを持っていると、本人も同じように「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」という逸脱行動の考えを持っている傾向があると考えられる。ただ、逆に友人への愛着または信頼が弱く、友人が「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることは良くない」と考えている場合、本人は「授業を休み、アルバイトや自分の時間をとることが大切だと考える」ということになる。Hirschi(1969)や小林(1993)らの研究結果のように、「友人との絆が強いと、かえって逸脱行動をしやすくなることがある」ということが、ここでも言うことができるかもしれない。ただ、家族のそれと同じように、友人との絆が強いことによって逸脱行動を抑止できることも言える。大切なのは、家族または友人が逸脱行動についてどのような態度・考えを

持っているか、そしてその人との絆が強いのか弱いのかである。

その他の分析として、絆の強さとその対象者から、4つ全ての絆について、家族よりも友人の方が絆が有意に強かった ($p < .001$ 、図3)。これは那須(2007)に述べられているように、青年期に愛着の対象が家族から友人に変容していることが考えられる。

以上の結果をまとめると、社会的絆が強いほどその相手との価値観のずれが小さく、似ている傾向があることを示しており、仮説が支持されている。Byrneの「態度が類似する人ほど好きになる」と実によく似た結果となった。

これは、Byrneらの強化モデルによっても説明することができる。つまり、態度の類似性はインフェクタンズ動機を充足させ、その充足が人に大きな報酬を与える。インフェクタンズ動機とは、環境に効果的に適応していくために、環境内の事象を論理的に正しく解釈したいという動機である。自己の行う解釈が正しいかどうかを判断する方法は、主として他者のものの見方・考え方と一致するかどうかによる。したがって、態度類似は自分のもつ態度が妥当なものであるということを示してくれる点で快となる。

また、相互依存性理論上からも、態度の似た他者は態度が妥当なものであるという確信を与えてくれる点で報酬的であるばかりでなく、目標に向けて一致協力して目標を効果的に達成できるという点でも報酬的である。さらに態度が類似していれば、相手から自分が好かれる可能性も高まるが、

このことも報酬的であるといえる。また、ある主要な態度が似ていれば、相手の行動や出方をあまり神経をすり減らすことなく予測できる点で、コストも少なくすむ。

同様な態度を持つ他者に魅力を感じることも、本人に緊張のない安定したバランス状態をもたらすことになる。F. Heiderのバランス理論によっても説明される。

そして、認知理論上からも考えることができる。類似したものは1つのまとまりとして知覚されるため、自分に類似した他者は自分と1つの単位を形成することになる。普通、われわれは自分に対しては好意的であるもので、自分と1つの単位にまとめられた他者に対しても同じように好意的になる。

本研究では、家族、友人共に「特に親しい人を思い浮かべてください」という指示をしているため、それぞれに大きな差が出にくい傾向があった。今後の課題としては、指示の仕方を工夫すべきだと考える。また、奥田(1993)が、類似性が対人魅力に影響するのは、重要な態度のみであると報告している。このことから、価値観尺度の項目について、重要な態度項目を更に検討する必要があるだろう。

: 引用文献

Argyle 1999 “ Causes and Correlates of Happiness. ” In Kahnemann, D., Diener, E., and Schwarz, N., (eds.): *Well-Being: The Foundations of Hedonic Psychology*. (New York, Russell Sage. Foundation)

- Byrne, D. 1961 Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 713-715
- Byrne, D. 1971 *The Attraction Paradigm*, Academic Press.
- Byrne, D. & Nelson, D. 1965 Attraction as a Linear Function of Proportion of Positive Reinforcements. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1, 659-663
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 *教育心理学研究*, 47, 180-190
- 金政祐司 2007 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 *社会心理学研究*, 22(3), 274-284
- 小林京子 1993 逸脱行動と社会的絆の強さの関係について 相互作用的地からの検討 *犯罪心理学研究*, 31(1), 39-48
- 無藤隆・遠藤由美・玉瀬耕治・森敏昭 2004 *心理学 有斐閣*
- Myers, D.G., 1999, "Close Relationships and Quality of Life." In Kahneman, D., Diener, E., and Schwartz, N., eds., *Well-Being: The Foundations of Hedonic Psychology*. Russell Sage Foundation.
- 那須昭洋・菅野純 2007 「社会的絆の理論」の再考 - 発達段階における社会的絆の機能変容に関する試論 - *人間科学研究*, 20(1), 19-26
- 奥田秀宇 1993 態度の重要性和仮想類似性 - 対人魅力に及ぼす影響 - *実験社会心理学研究*, 33(1), 11-20
- 齋藤勇 1987 *対人社会心理学重要研究集 2 - 対人魅力と対人欲求の心理* 誠信書房
- 高木修 2008 人間関係の今日的様相とその意味：資源としての「社会的絆」を基幹概念として -- (科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書；平成 18 年度-平成 19 年度)

[転載・引用をご希望の場合は必ず事前に下記までご連絡ください。]

掲載責任者： 土田昭司

連絡先： tsuchida@kansai-u.ac.jp

最終更新日： 2009 年 4 月 4 日